

2022 年度

舞台芸術学科

カリキュラム外部評価結果報告書

2024 年 1 月

京都芸術大学 芸術学部 舞台芸術学科

カリキュラム評価委員会

目次

カリキュラム評価委員会委員名簿.....	p.1
----------------------	-----

総評.....	p.2
---------	-----

評価結果

I. 理念・目的.....	p.4
---------------	-----

II. 学生の受け入れ.....	p.5
------------------	-----

III. 教育研究活動

1 [教育体制]	p.6
----------------	-----

2 [体系的カリキュラム]	p.6
---------------------	-----

3 [教育内容・教育方法]	p.7
---------------------	-----

4 [学修支援]	p.8
----------------	-----

IV. 学修成果・教育成果

1 [学修成果・教育成果]	p.9
---------------------	-----

2 [進路状況]	p.10
----------------	------

V. 内部質保証.....	p.11
---------------	------

2022 年度

京都芸術大学 芸術学部 舞台芸術学科

カリキュラム評価委員会 委員名簿

委員長：栗野武文

(東北芸術工科大学 基盤教育研究センター教授・副センター長／就職部長)

委員：澤口俊輔

(東北芸術工科大学 グラフィックデザイン学科教授)

西野毅朗

(京都橘大学 経営学部准教授／教育開発・学習支援室)

武田知也

(一般社団法人ベンチ／玉川大学 芸術学部 演劇・舞踊学科 非常勤講師)

総評

はじめに、今回自己点検・評価報告書を拝読させていただき、また当日の説明をお聴きし、大学の目標に向けて、舞台芸術学科の各教員と職員が労を惜しまずトライアンドエラーを繰り返しながら、年々増えている業務の一つ一つに真摯に取り組んできたことで、多くの成果をあげていると感じた。私個人としても見習いたいと思う部分が多くあった。

アドミッション・ポリシーの項目と各入試の指標との結びつきには再考の余地はあるが、「体験授業型選抜出願可者の出願率」は各コースそれぞれ21、22年度ともに学部平均よりも3%以上高くなっており、学科における志願者についても2019年からは500名を超えており、高く評価できる点となった。

教育体制については、目指すべき教員像を明確に定めており、その教員像に向けて細分化され充実したFD研修、特に教員相互による授業参観、ベテランの教員と若手教員の指導法や教授法の打ち合わせは特筆すべきで、それ以外にもSD研修の実施などにより、大学全体として教育の質の向上を求めていく姿勢が見えた。その一方、教員によって参加回数にばらつきがあることと、教員の業務量の増加については考えなければいけないだろう。

カリキュラム体制ではディプロマ・ポリシーや進路に向けて、1年次から4年次まで段階的に編成されており、また学生が理解しやすいようなカリキュラム・ツリーにまとめられており、学生が主体的に学びに取り組めるように構築されている。カリキュラム・ツリー上では教養教育やキャリア教育、産学連携科目それぞれと専門科目がどのように結びついていくかも理解しやすくなっている。

教育内容・教育方法においては、シラバス作成においての専任教員全員でのチェックを含むチェック機能が働いており、前述のカリキュラム・ツリーとカリキュラム・マップの整合性を図っている。また、学生自身がループリックを用いて達成度を確認できる仕組み作りもされている。それは「演技」「ダンス」といった言語化が難しい科目においても同様で、評価基準を教員だけにとどまらず、学生自身が納得できるようにしている点は評価できた。

学修支援について特筆すべきは、1年次より履修指導も含めて年3回個人面談を行っていることだと感じた。学生と相互に目標を定め、履修科目の提案・確認をしており、面談内容を大学独自のシステムに入力し、専任教員間で共有しているため、学生の困りごとへの対応もしやすくなっている。進路相談についても学修支援同様に面談を手厚くし、また学科独自のインターンシップを用意し、専門職への就職を促している点も評価できる。その結果が直近4年の進路決定率95.2、93.9、98.1、98.2%に繋がっており、卒業生の進路への満足度も年々高まっていることにも繋がるだろう。一方、今後は多岐にわたる進路についての指導方法を考えてもらう必要性も感じられた。

内部質保証では、学科の目標は4つの項目からなる教員業績評価制度と連動しており、管理職教員との面談を通じて教員個人の目標を適切に設定されている。

最後に、京都芸術大学の教職員の日ごろの研鑽により、大学運営がスムーズに行われているのだろうと感じた。ここまで述べてきたように、舞台芸術学科では大学が持つ素晴らしい施設を活用し、学生が能動的に取り組める環境づくりがされている。一方、教職員の仕事の幅が広がり、仕事の量が年々増えていく中、若手の教職員はどのように考えているのかが気になった。新入・若手教職員がベテラン教職員と同じ目線で大学・学科の目標に取り組んでいけるような指導がどのようになされているのか、今後注目していきたい。

2024年3月

委員長 東北芸術工科大学教授 栗野武文

I.理念・目的

1 学科の教育目標、人材育成目標は大学・学部理念・教育目標に照らして、適切に設定し、教職員、学生、社会に周知、公表しているか

【評価】4（よく出来ている）

〈理由〉

学科の教育目標、人材育成目標は、学則において「舞台芸術は、新たな価値観の創造に向かって様々な役職の人達が各自の独創性を発揮しながら協働、協調することで生まれる「総合芸術」です。舞台芸術学科では、主体性ある豊かな「創造力」と、他者を信頼し、また他者から信頼される「人間力」とを兼ね備えた「総合芸術」の担い手となるべく人材を育成します。」と定められている。大学の理念や教育目標である「人類が直面する困難な課題を克服するために、「人間力」と「創造力」を鍛え、社会の変革に役立てることのできる人材を育成する。」に照らし、適切に設定されていると判断できる。

また、「協働性」と「他者性」に着目している点も、舞台芸術の特性を踏まえた妥当な目標である。2024年度からは、市場動向およびテクノロジーの発展といった外部環境を踏まえた目標の更新も行われる予定であり、目標そのものを不断に見直す取り組みは高く評価できる。

学科の教育目標は、学生募集の案内物や、新入生向けのガイダンスでも周知されているが、恒常的には在学生専用サイトに掲載されているのみで、やや分かりづらい。大学ウェブサイト上において分かりやすく公開されることが望ましい。

II.学生の受け入れ

1. 求める学生像および入学者選抜の基本方針（アドミッション・ポリシー）を明示し、公正かつ適正に学生募集および入学者選抜を行っているか

【評価】3（概ねできている）

〈理由〉

アドミッション・ポリシーは、ウェブサイトや学生募集要項等で適切に明示されている。各入試毎の指標についても明確に設定され、指標に沿った入学者選抜が適切に行われている。

舞台芸術学科では、主要な選抜方法である体験授業型選抜において、単なるオーディションではなく、体験授業という学びを通じた成長を評価するなど、「入学者に求める資質・能力」を測るための工夫がなされている。

学生募集においては、高校演劇経験者を対象とした積極的な募集活動や、高校演劇全国大会でのチラシ配布等が行われているが、高大接続は昨今の大きなテーマでもあるため、全国高等学校演劇協議会との連携や、高校への直接の働きかけ等の実績は、積極的に広報に活用すると良いだろう。

2. 学科魅力（特色）には訴求力があり、適切な入学者数を確保できているか

【評価】4（優れた取り組みが見られる）

〈理由〉

歌舞伎やミュージカル、オペラ等幅広いジャンルの興行を行っている「京都芸術劇場春秋座」と「studio21」という劇場があり、社会実装型教育として、在学中にこれら劇場でプロフェッショナルの現場を体験できることを学科の特色としている。また、俳優、声優、演出を学ぶ「演技・演出コース」と、舞台美術、照明、音響等を学ぶ「舞台デザインコース」の2コースがあるが、両コースが協働して公演をつくりあげることや、他コースの授業も学べることなどを学びの特色としている。

結果として、オープンキャンパス来場者からの入試出願率は52.3%（2019年度）から65.7%（2023年度）と経年で向上しており、直近5年間の定員充足率も1.0を超えているなど、安定した入学者数を維持できていることは、学科魅力が受験生に十分伝わっていると判断できる。とくに、「舞台芸術」はコロナによる大きな打撃を受けた業界だが、コロナ禍にあっても志願者数、入学者数共に維持できた点は高く評価できる。

Ⅲ.教育研究活動

1 [教育体制]

【評価】5（優れた取り組みが見られる）

〈理由〉

「目指すべき教員像」として、教員に求められる能力・資質が明確に定められ、それらを開発するためのFD研修やSD研修が充実している点は優れている。舞台芸術学科では、各教員の主体性を尊重しながらも、各研修に1名以上の専任教員が参加するよう学科長が指示しており、2022年度は8名の専任教員がのべ39回のFD研修に参加するなど、学科全体で教育力向上に努めていることが分かる。ただし、教員によって参加数にばらつきがあるのは気になる点である。遠方の教員も参加しやすいよう、オンデマンドのFD研修がさらに充実することも望まれる。また、ハラスメント問題については、大学はもちろんのこと、舞台芸術業界において喫緊の課題であり、全教職員の必須研修とすることも検討しては良いのではないだろうか。

教員は、専門分野、年齢などバランス良く配置されている。演出やプロデュースを専門とする教員が不在となっているが、現状では学科長が領域をカバーしているとのことである。次年度から演出を専門とする教員が採用予定とのこと、教育内容がさらに充実することが期待される。

〈優れた点〉

○形式的になりがちなFD活動が、大学全体で実質的に行われている点は優れている。とくに、学科独自のFD活動として、初年次教育を担当する教員と、上級生科目を担当する教員とが、互いに授業参観を行っていることや、月に1回程度、ベテラン教員と若手教員とが集まり、教授法や具体的な指導法についてコミュニケーションをとっていることも、教員間のピアトレーニングとして非常に優れた取り組みであり、高く評価できる。

2 [体系的カリキュラム]

- ① DPとカリキュラムとの連関（教育目標との整合性、スコープ）
- ② CPとカリキュラムとの連関（順次性・系統性、シーケンス）
- ③ 教育研究目的（学術分野）に対する教育内容・水準の適切性

【評価】5（優れた取り組みが見られる）

〈理由〉

学部の定めるディプロマ・ポリシー（以下、「DP」）に掲げられる7つの能力が、舞台芸術学科の専門性に照らして具体的に再表現され、各科目とDPとの関連はカリキュラム・マップにおいて明確に示されている。さらに、DPや進路に向かって、1年次は基礎、2年次は応用、3年次は発展、4年次は発展／統合と段階的に編成されており、年次があがるにつれて学

びがどう変化し、統合されていくのかを、学生が理解しやすい形でカリキュラム・ツリーにまとめられている点は高く評価できる。舞台芸術を学ぶ上で必須となる知識・技能・態度が必修科目として初年次に配置されており、高学年次の実践で統合・昇華しようとする意図がよく伝わる。さらには、教養科目やキャリア教育、産学連携科目との関連も示されており、学生の多様な学びと進路に繋がるカリキュラムとして体系化されている。

〈優れた点〉

- 「京都芸術劇場春秋座」や、「studio21」を活用し、1年次科目のなかで「安全ライセンス（入門ライセンス）」が取得できるように設計し、これを進級要件とすることで確実に安全が担保できるよう配慮されている点は、非常に高く評価できる。
- 米国の実践的な舞台芸術教育課程を参照してカリキュラムを編成すると同時に、国際基準と照合し教育の質の向上を図るため国際団体「Asia Pacific Bond for Theater Schools」に加盟するなど、世界水準の教育の実現に向け取り組んでいる点も高く評価できる。

〈参考意見〉

2・3年次で演劇発表やダンス発表公演を行うカリキュラムとなっており、二つの劇場を活用した実践的な学修体験を得られることは、本学ならではの特色といえる。一方、4年間の学修を統合させる「卒業研究・制作」においては、卒業制作公演、研究論文、戯曲が成果物とされているが、演出や企画制作（プロデュース）といった領域の成果については言及されていない。平成29年の「文化芸術振興基本法」改正などを踏まえても、舞台芸術が果たしうる役割や可能性は一層期待されるため、演出や企画制作といった領域を充実させることは、京都や関西地域の文化芸術振興に寄与できると思われる。

3 [教育内容・教育方法]

- ① シラバスに基づいた授業の実施
- ② 成績評価
- ③ 単位認定
- ④ 教育方法の工夫・開発と効果的な実施

【評価】4（よく出来ている）

〈理由〉

シラバス作成においては、専任教員が非常勤講師や客員教授をサポートし、やりとりを重ねながら、カリキュラム・マップに即した適切な内容となるよう取り組んでいる。さらに、専任教員間ではピアチェックを実施している点も優れた取り組みである。

成績評価は、学部の成績評価ガイドラインに基づき適正に行われている。舞台芸術学科では、「演技」「ダンス」など、筆記試験やレポート試験では評価しづらい科目が多いが、積極的にパフォーマンス評価（ルーブリック）を導入し、評価基準を明確にしている点は評価できる。

コロナ禍には、国内外の専門家と遠隔で繋いだ授業の実施や、オンライン学生演劇祭への出展など、ICTを積極的に活用しているほか、アクティブラーニングも積極的に活用されている。また、舞台芸術研究センターが行う「共同利用・共同研究拠点事業」に学科教員も参画し、研究内容を教育へ還元しているほか、プロジェクトの制作や演者に学生も参加できる仕組みとなっている点は、非常に優れた取り組みであり、高く評価できる。

4 [学修支援]

- ① 学修支援体制
- ② キャリア支援

【評価】4（よく出来ている）

〈理由〉

入学時のガイダンスにおいて、教育目標や学科のカリキュラム、4年間の学修の全体像について、資料を用いて丁寧な説明がなされている。1年次の「コラボレーション基礎」では、「大学で舞台芸術を学ぶということ学ぶ」をテーマに、ラーニング・リテラシーをはじめ、協働力を身につけるためのワークショップの実施、将来の進路へつなげるための卒業生を招いたロールモデル研究などが盛り込まれており、初年次教育が充実している。

また、担当教員による個人面談が年3回実施されており、履修指導だけでなく、学生生活上の相談や、進路に関する相談ができる体制となっていることは、手厚い学修支援が行われていると評価できる。面談の記録は「KUALA (KUA Life Assistant)」に入力され、専任教員間で共有されていることも優れた取り組みである。

正課の授業発表公演や正課外の自主企画公演の準備・実施において、機材管理や安全管理を行う専用の職員がこれをサポートしている点も、組織的な学修支援体制として高く評価できる。

教職員が行う学修支援ではないが、下級生が上級生の舞台発表公演の制作を手伝うなど、学年を越えた学生間の交流があり、学修支援のひとつとして舞台芸術学科の特長となっている。

進路については、3年次後期からの個人面談において、学生の進路希望を調査し、学生個々の状況に応じたキャリア支援が行われている。劇団四季と提携し、舞台監督、音響、照明、衣装などの専門領域の研修に参加できる学科独自のインターンシップも用意され、専門就職や俳優を目指す学生を支援している。キャリア支援の充実は、進路決定率や学生アンケートの満足度に表れており、高く評価できる。一方、学生の進路希望調査は「俳優・専門就職」または「一般就職」という選択肢のみであることが気になった。例えば、「演出」という行為やその考え方などは、サービスや福祉、教育、観光といった業界でも十分活かせるだろう。舞台芸術を通じて学んだことを、幅広い分野で活かすような進路の示し方もあるのではないかと。

IV.学修成果・教育成果

1 [学修成果・教育成果]

- ① 教育内容・学修指導「学生生活・学習アンケート」
- ② 教授力 授業改善アンケート
- ③ 初年次教育力「1年次離籍率」
- ④ 標準終業年限での卒業率
- ⑤ カリキュラムの各段階に応じた目標達成度

【評価】4（よく出来ている）

〈理由〉

「学生生活・学習アンケート」の「所属学科の教育内容に満足していますか」「所属学科の学修支援（学習・大学生活・進路など）に満足していますか」「大学生活の総合満足度」のいずれの項目も、ここ3カ年の結果がほぼ90%を超え、また学部平均を上回っていることは、高く評価できる。2021年度の学修支援満足度のみ87.1%と学部平均を下回ったが、翌年度には改善が見られる。実践型授業に重きを置いている舞台芸術学科において、この3カ年はコロナの影響を大きく受け、計り知れない苦労があったと思われるが、学科教職員の努力の結果が学生の満足度につながったものといえる。

教授力については、4点満点の「授業改善アンケート」において、平均値が3.73となっていることから、素晴らしい授業が提供されているものと評価できる。学部全体で教育改善に取り組む「授業改善アンケート結果による組織的改善活動」では、舞台芸術学科の「改善対象者」は毎学期0～1名程度と少なく、連続して改善対象となる者がいないことから改善が適切に行われていると評価できる。また、「グッドティーチャー」として顕彰される教員も輩出していることから、優れた教授力があると評価できる。

1年次離籍者が多いことが学科の課題であったが、初年次教育内容を継続的に見直した結果、2017年度以降の1年次離籍率は改善傾向にある。一方、標準修業年限での卒業率は2015年度以降8割程度となっており、2年次以降の離籍が課題であるといえる。2割の離籍者については、集団制作を通して仲間との協働に難しさを感じる学生がいることや、健康上の理由がその要因であると分析されている。4年次の「卒業研究・制作」に関しては、集団制作から離脱した場合には速やかに個人研究に切り替えるよう指導を行うなど対応がなされているが、学科全体で「協働力」を身につける授業の見直しが重要であると同時に、少数（1人）でも優れた表現や成果に繋げられる可能性は残されているため、個人を伸ばせるような教育手法もさらに検討できるのではないかと考える。

カリキュラムの各段階に応じた学修成果については、PROGテストで入学時は非常に高いコンピテンシーが3年次に低下している。先述の集団制作の体験による、一時的な自信喪失ではないかと分析されているが、まだデータが少なく、継続した検証が必要だろう。GPAの平均値が学部平均をやや下回っているところも気になる点である。オンライン授業の影響も考え

られるが、推移を見守っていく必要がある。学修の集大成となる「卒業研究・制作」については、ルーブリックを用い、複数教員による評価が行われている点が優れている。ディプロマ・ポリシーに照らして評価項目が細分化されているが、項目毎の結果を検証することにより、さらなる教育改善へ繋げることができるだろう。

2 【進路状況】

- ① 人材育成目標に対する達成状況
- ② 進路決定率と進路指導の改善
- ③ 進路の質向上のための学部目標の達成状況

【評価】4（よく出来ている）

〈理由〉

学部全体で進路に関する数値目標が設定されており、重要指標となる「進路決定率 90%」については、直近4カ年で 95.2%、93.9%、98.1%、98.2%と高水準で達成されている。「早期内定率 70%」も概ね達成されており、「正規就職率 70%（学科独自）」は改善がなされ、直近2カ年は目標を達成できている。

進路の質を評価するため、目標とする進路先企業を職種を示した「進路パターン」による分析がなされている。業界を代表する企業にもトップランナーを輩出できているが、舞台デザインコースについては、専門分野への就職率が向上すると、非正規雇用が上昇してしまうという矛盾もあり、課題として残る。

初年次から3年次まで体系的なキャリア教育を行い、3年次以降は面接練習など具体的な支援も行うなど、手厚いキャリア支援に取り組んできた結果として、進路決定率は高い数値を維持しており、進路満足度も過去4か年で最高値となるなど、総合して高く評価できる。

〈参考意見〉

専門就職のなかには、俳優養成所への進学や、個人事業主としての就職も含まれているが、そもそも舞台芸術に関する専門職が、経済産業省の産業・業種分類にも含まれていないなど、「業」として一般的になっていないことが業界の前提となっている。よって、既存の専門就職を増やすことを目標にすることは、受け入れ母数が少ないために困難が伴うだろう。

先述の通り、平成29年には「文化芸術振興基本法」も改正され、文化芸術の固有の価値と意義を尊重しながら、まちづくりや国際交流、教育・福祉・産業分野との文化芸術の関わりが求められ、認められている。同時に、舞台芸術の社会的役割や、そこで働く人の職能も、上演のみに留まらない多面的な価値が認められ、変化してきているといえる。当学科においても、舞台芸術の学びの中で培われる力がどのような可能性を切り拓くのかを示し、「既存の専門就職」に囚われず、一般就職含めて多様な進路選択へと導くことが、「芸術の力を社会の変革に活かす人材の育成」という大学の理念と照らし合わせても、適当ではないだろうか。

現在 30 代～40 代となっている卒業生のなかには、現在の日本の舞台芸術界において、商業・非営利問わず国内外で中心的な役割を担いつつあり、多くの影響を与え始めている者が複数名いる。このことは特筆すべき成果であり、芸術系大学における学修成果・進路の評価として、短期的・即時的な評価とは別の指標を設定することも重要であろう。

V.内部質保証

【評価】4（よく出来ている）

〈理由〉

大学全体の内部質保証体制のなかで、各学科は毎年度の「教育計画・学科目標」を中心に、学部方針に即した目標の設定や、課題検証を踏まえた改善活動に取り組んでいる。学科目標は「教員業績評価制度」において教員個人の目標と連動し、目標達成のために、学科長が教員個人との面談（1on1）を行うなど、管理職教員と一般教員とのコミュニケーションの機会が適切に用意され、組織と個人が丁寧に結びついた質保証の仕組みが構築されていることが分かる。

「学科等単位評価」という、組織の評価が教員個人にフィードバックされる仕組みや、教員業績評価が「教育」「研究」だけでなく「学生支援」や「学科運営」の4項目で行われている点も特色的である。

客員教授、非常勤講師には各セメスターの授業開始時と終了時に学科長と職員とで個人面談を実施するなど、学科長を中心とした組織マネジメントが確立されており、学科教育の向上や運営の改善が実質的に行われていることが分かり、高く評価できる。